

戦場語り継ぐ生還者

平和のすがた 戦後70年 第6部

1面から続く

残された者たちは戦死した兵士や家族の思いを引き継ぎ、生還者たちは戦場の記憶を伝えてきた。

弾が爆発する音が響いた。飢えと病で絶望した兵士の自殺だった。「埋葬するにも、湿地帯で深く掘ると水が出る。浅く掘って泥をかけるだけだった」
2004年12月に自費出版した手記にこう書いた。



戦場で使った聴診器を手元に置いて、思い出を語る三好正之(山口市阿知須)

「歩兵第百二十四連隊」によると、上陸した3347人のうち生き残ったのは625人。生存率は2割に満たない。敵との戦闘よりも、栄養失調やマラリア、脚気で死んだ兵士が多かった。一橋大教授(日本近現代史)の吉田裕(60)

「歩兵第百二十四連隊」によると、上陸した3347人のうち生き残ったのは625人。生存率は2割に満たない。敵との戦闘よりも、栄養失調やマラリア、脚気で死んだ兵士が多かった。一橋大教授(日本近現代史)の吉田裕(60)

は、「国力を超えて戦線を拡大し、現地の事情もわからないまま兵士が南方に送られた。マリアナ対策でも米軍に立ち遅れ、航空戦に敗れて補給路を断られたことで、大量の餓死を招いた」と話す。

終末期の患者に寄り添う音楽療法士

佐藤 由美子 さん(38)

ひと

米国の学生として、オハイオ州にきた。ハーブを持つ自宅や病棟をくす。人生を生きる手伝いを患者らに、6年前の性と出会った。襲った沖縄戦。「何で私だけか」と思っている。歌う、懐かしい曲を、戦争の重なる。訪問を重ねる。「私は生きて」「言葉が」



戦死者の記録整備進まず

「今も夢を見て、うなされることがある」
出征の際、妻と生後間もない長男に残した「遺髪」と爪、戦場で使った聴診器を大切に保管している。

日本医科大学を1942年に卒業し、陸軍軍医学校に入學。1年の教育を受けた。44年1月、軍医としてニューギニア島西部(西イリアン)に上陸。過酷な現実を目の当たりにする。

戦争中に兵士たちがいつ、何人死んだのかというデータはどのように記録されているのか。

44〜45年の2年間で犠牲者が一気に増えたことを岩手県の数字が裏付ける。サイパン陥落の時点で戦争が終わっていたら、犠牲者の数は大幅に減っていた。

岩手県では64年、「戦死者の叙位叙勲」の開始が閣議決定されたことをきっかけに「戦死者叙位叙勲調査」を作り、それをもとに、兵士が死亡した地域や年齢(生年)、階級市町村ごとのデータを詳しく整理した。

「軍人恩給や遺族年金などを支給してきたので、政府・都道府県は、兵士の詳しい資料を持っていない。政府の責任で、戦死・戦傷死・戦病死した兵士たちの資料を整理し、歴史資料として人々が共有できる形にするのは、国民を戦場に送り出した国家の責任であり、義務ではないだろうか」

米軍の攻勢が強まり、翌2月にはニューギニア島の北方にある日本海軍の根拠地を失った。海も空も連合軍軍側に支配され、薬や食糧の補給が断られた。

兵士たちは水草やトカゲを食べた。高熱にうなされて息を引き取る者もいた。三好自身もマリアナで10日間以上、生死の境をさまよった。夜明けになると手榴弾が爆発できるようにになった。

44年は日本の敗戦を決定的にした年だ。サイパンなどマリアナ諸島を占領した米軍はB29爆撃機の拠点とし、日本本土のほぼ全域を爆撃できるようにになった。

「記録がない」という。公表されているのは日中戦争開始以降の軍人や軍属などの戦死者の概数で、外地では210万人(一般邦人などを含めた戦死者総数は310万人)。63年に閣議決定された。ただ、このうち41年12月に始まった太平洋戦争での戦死者が何人か上るのかについては「根拠となる記録が残っていない」(担当者)という。

旧厚生省援護局が64年に作成したとされる「大東亜戦争における地域別兵員及び死没者概数」だ。

兵士の死をめぐる基本的な記録を共有できていない日本社会。恵泉女学園大名誉教授(日本・アジア関係論)の内海愛子(73)はこうみる。

「軍人恩給や遺族年金などを支給してきたので、政府・都道府県は、兵士の詳しい資料を持っていない。政府の責任で、戦死・戦傷死・戦病死した兵士たちの資料を整理し、歴史資料として人々が共有できる形にするのは、国民を戦場に送り出した国家の責任であり、義務ではないだろうか」

「軍人恩給や遺族年金などを支給してきたので、政府・都道府県は、兵士の詳しい資料を持っていない。政府の責任で、戦死・戦傷死・戦病死した兵士たちの資料を整理し、歴史資料として人々が共有できる形にするのは、国民を戦場に送り出した国家の責任であり、義務ではないだろうか」

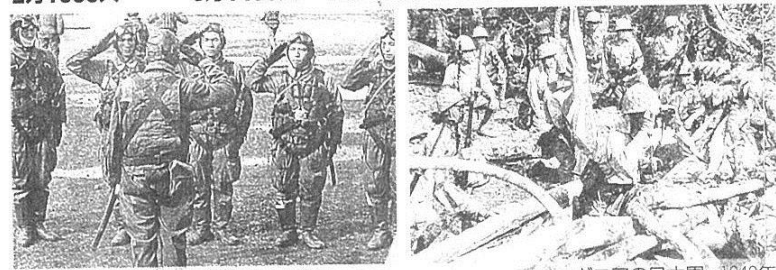
「軍人恩給や遺族年金などを支給してきたので、政府・都道府県は、兵士の詳しい資料を持っていない。政府の責任で、戦死・戦傷死・戦病死した兵士たちの資料を整理し、歴史資料として人々が共有できる形にするのは、国民を戦場に送り出した国家の責任であり、義務ではないだろうか」

「軍人恩給や遺族年金などを支給してきたので、政府・都道府県は、兵士の詳しい資料を持っていない。政府の責任で、戦死・戦傷死・戦病死した兵士たちの資料を整理し、歴史資料として人々が共有できる形にするのは、国民を戦場に送り出した国家の責任であり、義務ではないだろうか」

「軍人恩給や遺族年金などを支給してきたので、政府・都道府県は、兵士の詳しい資料を持っていない。政府の責任で、戦死・戦傷死・戦病死した兵士たちの資料を整理し、歴史資料として人々が共有できる形にするのは、国民を戦場に送り出した国家の責任であり、義務ではないだろうか」

「軍人恩給や遺族年金などを支給してきたので、政府・都道府県は、兵士の詳しい資料を持っていない。政府の責任で、戦死・戦傷死・戦病死した兵士たちの資料を整理し、歴史資料として人々が共有できる形にするのは、国民を戦場に送り出した国家の責任であり、義務ではないだろうか」

日中戦争以降の地域別戦没者の概数(本土を除く)



出撃を前にした特別攻撃隊員=1944年
ニューギニアの日本軍=1943年
厚生労働省の資料から、240万人の内訳は軍人、軍属など210万人と一般邦人30万人。日本軍の最大進撃線は1942年、「詳説日本史研究」から

取材後記

戦死した千三の母高橋セキは、村長にこう語ったと伝えられている。「兵隊にやりたくねえど思っても、天皇陛下の命令だればしかだねえ。生まれた時から、オレの子どもでながったの」
国家の論理と個人の心情のはざまに苦しむセキ。しかし、長く続いた平和の下で、どの町や村にもセキのような母親がいたということが忘れられつつあると感じる。「忘れるな」。セキのメッセージは明確だ。無謀な戦争はなぜ起きたのか、国内外に何をもたらしたのか。記憶し、記録する。そして問い続けることが戦後世代の責任ではないか。(編集委員・豊秀一)

ゆたか・しゅういち 1965年生まれ。論説委員、東京社会部次長などを経て編集委員。憲法や平和の問題などを取材している。

敬称略